

先日、長野県松本市で開催された「第2回世界健康首都会議」に出席した。松本市は昨年、世界健康首都を宣言し、市民の健康寿命が延びるための活動をいろいろと進めているのだ。

三菱総研理事長 小宮山宏

プラチナ日本

会議の中で、「ロボットダイレクション」というスウェーデンのロボット産業の産学官連携機関から紹介された2つのロボットについて語ってみたい。イノベーションの必要性が叫ばれながら、十分な成果を出せないでいる日本の現状を考える上で極めて参考になるからだ。

レストランで食事をしているボスターを見たことがある。寝間着を着たまま介護者に食事をさせてもらうのと、一体どちらがいいだろう。日本にも化粧をすればおしめがとれる、という言葉があるのだ。

紹介されたひとつは、食事支援ロボットだった。腕が不自由になった高齢者がわずかな動作でスプーンを操ることが出来る。夕食時、このロボットを使って家族の団欒に加わることができた高齢者の顔には、威厳と輝きがあったように私は感じた。こうしたロボットの支援を受ける2人の高齢者が、きっちり正装して、

介護をロボットに委ねることについて、スウェーデンでも当初、アンケートで賛成は4%ほどにすぎなかったという。しかし、これならほしいのでは、それで駄目ならこれは…と試行錯誤を重ねた。その結果、成功を収めつつあるのが、この食事支援ロボットだという。事故が起きたときの責任を誰が取るか。そもそも高齢者に受け入れられるのか。そんな「入り口」の議論ばかりで、先に

長寿を喜べる社会



進めない日本の現状が歯がゆい。もうひとつは、コミュニケーションロボット「ジラフ」である。人が呼ぶと近くにやってきて、遠隔にいる人と顔を見ながら話もできる。パワーが落ちると自分で電源の場所に行って充電する。1人暮らしの親と離れて住む子供や要介護者とのコミュニケーションに役立つ。ロボットダイレレンの参加者は「技術は日本が最高。しかし、実際に社会で使われるようにしていくことにかけてはスウェーデンが最高。だから互いに協力しましょう」とコメントしていた。彼としては正直な意見なのだろうが、私には痛烈な皮肉に聞こえた。このロボットを見たパネ

レベルは高度ではない。このことは現在の技術だけでも、相当のことができるということを示している。「自分ならもっとよいものを作れる」と言っている意味がない。市場で使われてはじめてイノベーションといえるのだから。高齢化先進国である日本は、国内に莫大な需要を抱えている。よい製品を作る技術もある。素材から部品、組み立て技術…こうしたものづくりの集合体をすべて抱える国は世界に類を見ない。問題は市場への導入なのだ。規制緩和も必要だが、それを逃げ口上にはいけない。日本の宅配事業者は、規制との戦いの日々であったのを想起してほしい。

リストの一人が、高齢化社会が問題というが、長寿「ルンバ（掃除ロボット）にさおを立ててスマホを載せただけ」と喝破されたように、技術はいい。（こみやま ひろし）